繪本国村物語

二

貴
977
2

復讐奇説田村物語　巻之二

武關　川上魑老　人編輯
下流　梅梢軒關旭　訂正

第三回　觀音の告

天命豈松さるれこと能得んや。関正市正秀ハ。数ゝふのうらみを袖の柵せさめんと。天も悲しみ地に哀ゝて。毎念の歯がみ怒なりそしらぐも。敵ゝ乙女がうこかゝ。あゝで消やれ乙女が遺體を抱さあげ。巳が衣數を脱て乙女ふうち著。我を却つゝ赤裸ゝ。なゝ背ゆ負くいそで吾屋へゆくんとせしが。何ゑゝん足ゝ障アて躓きけれゆ。忽痛ゆむゆゆゝ。右の足ゝ怪み。左のまゆ丈負くれ乙女ゆ押ゝ。右のまゝ以て探ゝ見ゝ。いゝ血ゝはゆ染てけり。扨ハ木の根岩角ゆ

踏かけゆるかと。木の間をもれ〳〵月影はすかしてれでとかくとも是
一つの小柄うれぞ取あげてうれて。小刀の氷うとと光アハ月は對て清く。
表は浜路嶋の三字ぬ記し。柄は金銀をりてあるの浪は群くぶ図
を鐫〳〵う。西市竊ヨおりくらく。かゝれ人里遠き山路ふいぞう斯の如
き小柄の落〳〵有ぞれ謂ゆし。はしや又猟師みどの落せるあもせよ。廣
人の持ぞれ不ともうへげれで。よしありげなれ此小柄察ふ所ぞれ
乙女が吉し賊の。松の枝を登りつ下りうせ〜折め〳〵取落せれ物ゆ人
う。尤めれば歌を求むる便ともなれべ〜と。悲この中小〜しく力と好。吾
ぬとさしてゆぞけ。正右衛つ夫婦を正市力ゆぶれ而已。乙女と
うへぞれで。何とかゝん公驚うれ〳〵胸苦しく。夫婦門邊ふ〳〵出かれこ
とかと〳〵尋求むる折かゝ。正市いちゆ〳〵乙女が遺體を脊負〳〵歸

まれぐ。両親を此めりまを是をうれよも。生柴ハ乙女ヨ抱けぬ。むせぶ
涙の声振。いうあ乙女よ〳〵と息の限りん呼うれど。去夢魂のゆるれ
間答のなれぞ衣なり。正右衛つも前後不覚ゆうへ〳〵ウれが先ぞう泪押
拭事の始末尋れ。西市いへて乙女が末期の物語り。又眼ぬ〳〵
事〳〵。種〳〵れ露も残さぐ説終ぞ。生柴を待も恩愛の胸れ焦
ヨ嘘ようう。むぜぶ炎の煙アとう。頼むカもるく〳〵に伏沉こてぞ居〳〵
けれ。斯〳〵あれるれヨあ〳〵孫ば正右衛つ正久容を改め歎ぐくしらく。
非業ヨ死るも是天命の道ぶれ所なれば。此うをなれ跡のゆ〳〵先
勢なれと父子二人へすぐ〳〵と。野辺の贈アも懇ヨ営にしゆ。生柴い竟
ヨかゝれて乙女が事のなりしく。明ても暮ても不便さの。ゆ〳〵てれ打
うれがいとしや。終ヨ狂乱の公げ〳〵て声瞽。うゆ〳〵人〳〵めぶうヨ〳〵。

関正右馬つ長
真柴
娘し女の
死刑よ
心乱す
関正市
真柴
関正右馬門

あれはこの女子のまゝ子ぞよ。つゝハを慕ひて来るぞよ。つゝハも彼
と知るゝばかりのみ歎てをせばこの物ぞ。恥しや嬉しやなの。我子
よ乙女子よ。乳房わかれ〳〵夜の鶴の子ゆふのくゝふ黒髪ハ霜を戴く
未ましても咲出て花ハ娯み。細き燈りれ敷戸ハも憂年月の今更ハ
別るゝもあれ形ばハ吾身といふながゝえんと。乱れ心のくゝ形くも
たゞよふハ足のよ〳〵と走り出んとせ所を忍ん撞つ正ものまと取てをろと
り留。女性くゝ云ハゞ〳〵正右衛つ正久が妻かゝれぞ。歎よ沈こて公礼とその
身を毀じ不孝とやいゝん下愚とやえん賢くも其理を顧て乙女ハ
るハ天命とあきらむるしかくもゞ精神を離めてこゞかゝ死ぬ拒く
ぞゝ次と。教愉の言葉数度正市諸とも勞てく。夜昊打ぶつ。破
屏風引廻て。一間のもゝこに休ませられぶ。ぶい柴を猶も一度を悲み

もと度を怒り。兎ハも角ても公ゝるてしく。食ハ絶とと七日ゝ。いゝ
成宿世の報ひハや。三十八を一期として。眠ふぶ〳〵とく身ハ力ハ
正市の悲ゝはいかもはゝ形ゝ。正右衛つも同じ歎きに伏ぶみ。
ゝづゝ二旬もるゞ。炊臼隆毛の憂をゝ。鰐ぐゝ沸ふ鉄
石も蹇ゝ。日毎ハ寺ふ参ぬ。印の塚も中しに。埋まゝ
名とゝゝはけても。憂の数し積ふ。ゝ是より後ハ正市ふ
何くゝと。家のゝもも打仕せ。其身を引竈アて。朝ゝ夕ふ佛
の燈明。香花の向の外ふ。ま業ハなく。ゝかなゝ月日と送る。
正市倩謂くゝ。勿論なゝかゝれ歎きに逢るも。我不孝のなせる
所なゝ。其所以如何となれば。鶴翁の山荘ハ至りてハ物学ぶ
るゝゝ心を悉。我家へ帰ゝの遅さとゝ。父母ハ家ふ案事煩ひ

五人。妹しを門邊ゐ立出く。更て夜さくも打忘れ。我と結しよ仝
天命とゝ云ながら不慮の最期を遂しゝ。母上の涙ゐ袖ゐ洗
かゝぶけりゝて経し世代早ゐ去るゐ。父上ゝても重祢くの心
歎きゐとの頃の悔めりさは忍ぶ苦しく。皆つゞ不孝の故
とゝ絶く。已ゐ責れ正市ゐ直なるゐ赤心ぞゝのもしき。かくて月日
の過れゐけるゝ。尤なるゝに貧し家の今を正市獨の業
ゐいゝと紛擾ど。夜ゝ絶秋父の傍を放ぎ。四方の咄ゐふゝろゝと
慰ゐはゝゝせ。父寝ぐ自とゝ絶ぐし祢励きゝ。縄を打ゝ莚ゐ織
朝ハゝゝ起出ゝ。竈のゝとに薪をしくゝへ夫くゝのゝ當いゝゝう
も急ゝぶ。父の紀出れを待ゝくゝ茶ゝ進め。火桶ゐど心を付て。
父子ともゐ朝の食終りて後を。父ゐ暇ををひ。或時ハ手ゐ拾山ゐ

登ゝ弓箭を取ゝ猪鹿を射。又ゐれ時を鈴鹿川ゐ網ゐ投じ
釣をゝる。奥鳥獣の差別なく。獲物あるゝれハ市ゐ鬻ゝ。是を
りて。父の好めれ物を進めその。懽悦れ顔ゐ見てハ己が労をも打
忘れゝ爵踊けれとぞ。然るに或時いつものゝ鈴鹿川ゐ至り
て垂綸せしゐ。此日ハ殊ゐ風寒く一尾の魚も得ざれぬ。いと不
無氣なれ折しも。思ひそ只ゐ鮒れ鯉魚を釣得ゝり正市
斜ゝれ歡び。今朝より の麟をも散じたゝ。一尾なりとも持
ゝりて父のゝ慰ゝ奉らんと。竿打ゝゝゞ行んとせしゝ。
一くの道士忽然と出ゝり正市ゐ向て曰ゝ汝ハ関正右衛門正文
なれ者の一子。正市正秀なるや。正市いくへていゝゝも然り。神人
そこれ何を所より来りて。人尊號ハいゝゐ宜ふぞ。我名て

清顔を知らんぬ。又我等父子の名を聞きあひ。母子有氣なるもいと不審はしと暗き彼道士の有さまなれば敬ひ慕ふ道衣を曲れる杖を突目眸ものづくし仁慈と含こ。両耳に二の環成かけ。麝濃き聖のごとく。腰に垢付きたる綿繡の嚢を帶。昂々然として凡なるざれど。西市と名を流し深く伏し。跼まて其ゆゑを問ふ。彼道士又いとらく汝の至孝神佛のとく深き通徹汝に授かるものありとて。腰なれ嚢の中より。一の白璧と二枚の字とり出し。正市に與ていとく。是をて千手觀音の隱篆なれど常に信じて武運の長久を祈ア。苟も私の心を抱くるのなこれ信れるうちかくびで。汝に明君はたく名と天下に裏し。祖先の家名と擧んる疑ひ。一枚を常に屬と放つのかと。殘れ二枚の内一枚を主君と仰ぐ人に奉ア。又一枚は主君の内室となれべき人に奉ア。遠くは七年遅くとも十年に出でて必驗あらん。將いの白璧を賣るべと富貴の人に賣與て。その價を以ぬ汝の世に出れまでを。いとなみとなるべしても父子わどくみは命を繫く便となれるべし。只今鉤得られ鯉與を。その作放ちやりて。早く家に帰り是よりは志を立明君を撰んく勤仕よ。是豫天命の応ふ幸あれ所なれど努嫌疑るのなるべし。情や勵ようや功成名とげて後かくびに君ふとめて大伽藍を建立千年記念と偈仰せで君臣ともに。家門弥増に繁茂べし。我は行數居士なりと。いふと思へば彩雲覆道士の形を失ふければ紫氣なる殘アく。香の薫馥郁り西市奇異のおりひとなし。紫雲の消

関正市
行叡居士

関正市

行かゝふお向ひ伏拜ゝし暫しの忙然としてありしれが。彼行敷
居士の教を隨ひ。鯉魚をその侯を放ちやり。授れ所の憑篆白
璧と押戴き。家ふゆりて細ゝとありしるゞも父を物語れば正久
も不思儀の苦を達のうれと。或ハ感じ或ハ歡び。元来正直の
人なれば甚夜更後夜眠とあさつぞ。熟ゝもりあるゆりて。明れを
待得て正市を語て曰。扨吾先祖そ汝も志るゞゝ諸侯の血筋
なれふ。尤なゝ武士の家を産ながら。碌ゝとして人間を終るも
本意なゝ。されべとて我ハ積り歳とし。況や浅質毎学を
志ゝ文武よりゝ。今更後悔の註もなし汝ハ我ふり久て文武の
嗜弓箭の道も暗からぬれど。行敷居士の教を隨ひ。忠義仕官
をおりひ主都を登り明君を擇んゝはゝへ忠義の臣となゝ。いろ

家名とあゝ。ゝさべ。埋れ我ホ生で老後の歡喜ゝとあ
ゝや。予が孫ハ知縁の方に身とよせゝ。如何ゝもなゝべきとば。
必ゝ残ゝ。と残さゞして帰ゝにおりひ主ゞし。少しく孝道を守らんと
て予に離ゝを忍ゞ。却て父が心を違ふべゝ。ゝのこなゝ汝
京師を登れる二ッの謂あり。一ッハ山城を大都會なれば明君
を求る便あり。二ッハ妹乙女が横死せ歎ゝ。母人もそのまを
ゝ死せゞれゞも。乙女が横死のゝ。ゝふゝ。病の媒ゝハなれるれば。
天寿ゝいゝ。則母の歎も同然なれ。左ゝれべこの二ッのふ
と仏ゝ。ゝめて大望とおりひ。ゝ。神佛加護の恵あゝべゝ。付
ゝ忠孝両全のゝゝ達るもあるべゝれ。兎ゝ角に家月人が
待ゞれば。ゝゝ都ふ帰ゝゞし。子も又時を待ゝ跡ゝ都ふ

おのゝ〳〵。父子再會を遂べきさ好り。強く予に離れ難く其況
厭ひなんで。明日をも知らぬ人の命。老が才の少部の露と消る後
を父ふ歎バ知られるも叶ひがゝ。將何ハ哭ん易されば終ふを
何一ツ志ども遂ずして。忤木とともに朽果んハ生るゝら狂死せ死も
同じ道なるを。汝ハ智勇を備れバ。多言を述れふ〳〵ざれども。予
誠心を今〳〵に語り失されうくうハ甚解を量知ずと。余義
なれ父のことの葉ゝ。正市ハ感數肝ゝ銘じて回答さん。胸ゝせうう
ておもてをぞ。涙流ふ袖をぞ濡りけれ。漸ありて正市ハ兼る涙
拭ふ〳〵ぬぐ人。席を辟跪て答〳〵ふく。某性魯鈍はして。道ゝ
といへども。如何ぞ禽獸とひとしく。天地の間ゝ〳〵んや。只今の教ハ
蒙り。村雲と拂〳〵天日を見れが如し。去ながら〳〵いろと定られるも

なく。暫〳〵父の左右を離まらせて。遠へ雲井の旅路ふ赴
かは。日毎夜毎ふ他人のまゝ養ひとるゝ。左とも法仏の休れ隙
もなかれめれと。屢ゝ父ゝ〳〵ての。重れ仰をいるこなれも又不
孝の罪の重ければ。急ゝ角ふ命ゝ去ゝ。一先都ふ上り二ツ
の大望その宜ふ遂つゝ計つゝ。旅行の用意もなるべれ
どゝ。ふでだふ貧〳〵家の少〳〵金錢の貯もなれば。さし當て
てへいふゆとも。せんなくなとそ口惜れと。いと打去ゝて物語ふ
正右衛門正久笑つゝ曰。汝ゝ〳〵れ〳〵や。彼行慮居士ようける
白璧とそ。教のごとく〳〵富貴の人ゝ賣ふ〳〵て。大望の助とせ
よ。いろまで白璧を全〳〵して。相如が昔に效るゝ〳〵や。夫ゝ漢土これ
ハ倭の〳〵まの緒の。結ぶちとゝの親子のため。早〳〵に賣代るして。

夫くれ用意こそ肝要なれと。ありけるば正市よ孫とび。實も件の白璧を貧き家ゐ伝へるとも。何ぞ幸かるべき。庄宦こそ何不足なく長者とし。かくれ宝貨を好めれ人なればかくて行て話ずんと白璧を袖ゐし。庄宦をとして急ぎ。徒もなく帰るり我父郷よろこびなんし。彼白璧をかくに至りし。百五十枚の銀子を智くれば則父ゐ奉れかう。某旅行の用を絶聊分ちゐるべば。明日ゐも旅よ打立ぎしと。勇こいさわび正右衛門も固ど去悦の眉をひらくた。幾ばく明日ゐ立ぎ。將その銀子を我ハ少しく分得て。此村里のちぐの方に。いとゐも多き家ぎし。汝を旅路よおりもく分の。珠よハ都よ蓄つきめれそぐ。日ぐの入用も多くぐく。武具ホの用をもめりとけ是ば。二十枚を我方ゐ留めおき。残ばを汝持行ぎしと。理をつくしたる父が言ゐ正市何も迷惑し。さぐに言ばけくしいるしく。漸を七十五枚ばく半をとりて。急ぐ用意を調へり。是とゝ以も正市が至孝の徳ぞ。ありがくた。頃しも付兩月の夜のなぐなぐしれも。今暫ハ旅の門出ぞと。父子觴汲うに。打祝ふひまゐも中くゐ。別ぎの袖を老ぐ父の。正右衛門をいつう再會の時至ずんと。包涙の浮めれそ。ちぐれ袂ゐ埃るらん。正市もおりぐ声くりて曰。某都よ上り。彼所ゐもちはるぐ。早くゐ便りせん。速よ郷ゐ登りゐ。某ハ孝養をるぎめ玉ずんゐぞ。願いしけぎと。ずとくに冀ゐ。正右衛門曰く。射至りて再會ゐをべとゐ。我幸をるぐ如く健ゐれで聊

とゝゐを残さるゝ形く。只頼しさは。先ゝ公そうゝ語りし歓の行儒と。仕宦の頼ひ。首尾よく成就るさんことそ。マヤが志所なれど。此事ぶゝ整つゝ。予そ譬死せれとも。猶けれ公地ぞせめ。能くこゝろ銘ぜよと。父子こゝろ人なれ物語ふ。夜そそのゝぐと明渡る。そや東ふかゝるひのいの立のゝぎとば。二人そ驚れ時剋ぞ至りぬいつまで名残い盡せじと。門邊ふゝら出るが正市又いくらゝ何れと公忙しく。や残ゝけるそ。某我長しより父ゝもきしめを如く白鶴翁を師と憑大恩浅きふあゝざれど。此度みやとふ登りわれ暇乞ふもまりべたぶ少しも急ぐ旅なれど。返さゝも此事よれふ侍くゝのるべし。程都より襲指をもよそべしかりと。頼をけとべ。正右衛門そ

散ゝ。我よれふ侍くゝん。早ゝに打立ぎしと。まゝくしくも正市の後ふ廻り。是彼と世話も誠の親の恩旅荷とそもふ打荷ひ。都の空へと急ぎきり。

第四回　異石の能

偖も弓木甲斐守照門そ。倩おりふふいわれ延暦十三年。小倉山の御狩の時。己が射留んとせゝ小牝を。田村麿逆なれこて汚より。狩場の外ふ放ゆりて。我手柄と妨げ。剰天皇よりれ恩賜ふ。甚身の面目をわどとしるれ。おりべゝ公悪ゝいふふも彼に辛めれせゝ公んぞと。さもゝふ奸計を廻らせゝも。なるべれ便も形ゝ打過ゝれが。照門が長臣岩岸權大夫といれ者の一子ふ刑部太郎廣成とて。歳七二十ふるゝれゝも。其聰明伶俐こと

衆人ふとへ。面色墨を流せる如く身の丈六尺あまり眼人を射て頬ゐ一ツの痣を印し胸ゐへ竊ゐ恨の心を含むといへども。夢さへ色ゐ顯さで。却て些しく風流の道ゐ遊びて。朋友の交りも敬讓ていさゝかも爭ふ事なく。力量を山を拔の手ぶりこめれば。照門厚く是を愛し。閨門といへども刑部太郎を。日夜憚るゆゑ。ゆく〳〵出入して。深く主人の心を窺ふ。頃しも夏の夕ぐれなりしゐ。照門夫婦をゑじめ。刑部太郎もこゝ迄ともに。居合て酒宴半の頃なれが。月漸東方ゐ登りて庭の面を照し。池ゐ臨めれ古木の柳を。秋水ゐ動きて青龍の登れること怪こ苦むし石燈ゐ龍を。影長ゐ人の歩むこと疑ふ。螢木蔭よ消のこと。魚踊る月のさやけこと知れ。盆のあつさは風ゐ消。夜の涼しさゐ因ゐ忘へぬ秋もかよへれけるこひあて。いと興ぬく玉の觴ハ左ゐ廻り。右ゐ止り。媚ゆ狀ぞる左右人ども。今宵の月ゐ愛めるゆ。声も麗ゐ唄ふめど。夏香あふる色くれ。花の袂と飜し。たち舞ふ壹衣の乱れ。紅の間ゐ〳〵脛の白きさえ。対ちゝね雪の散るゆ。天津乙女の舞ゐ〳〵でいと。照門を餘念もゆ〳〵足とゝ舞これ。抃笑ゐて居こりけれゐ。照門の内室白波と舞へ。盛を少しこめれど。花の顏月の眉。名ゐ〳〵れ美人も恥ゐぬ〳〵の姿ゐれど心をそれゐ〳〵久て其性質嬌亂れゐ。志ゐも嫉妬のこと深く。左右人ゐの舞ゐ〳〵ゐ。照門の深〳〵も愛ぬれ。仙の内ゐ打怨こて。暗ゐおり〳〵れを。今こそ夫婦の間むつましけ日ども。ゐ月日に関もなくれど。我ゐ次第ゐ憑る花の。彼ゐハ蕾の咲

白ゐ

刑部大郎
源門重
白股
怪し連

生れ。今と盛りの久香なれど。えくらえんも口おしく。月も晴
まぢこゝろを冒す。胸の鏡はうち曇り。酒宴の奥も中くゝふ憂の
数とぞなりけれが。不図酒氣に酔て幸月も
清くれど。酔を醒し徒くんとて。庭の飛石うち伝めて。甚所歩廻
軒端ちらく行しにむもほくども又。月ゆうれく池の邊まで歩
うし。水の面ゆ泳まば。空と一つの月の浮ゆ
あぢいと不審くれ申ぶど或も仰向。或しい俯して見るとゝふ。
しか二つの月新の。その一つを足かとに流まし。水面ゆ鏡ゆ浮
めー如くゆれぢいよ〳〵不審の公ようり件の月れ裡をさし覗けど。
こゝいゆふさも苦しげなれ狐の面れ。眼ゆ一つの矢ゆ貫さ。血よ塗
れ有さ。おそろしなども愚なり。白波そもりろど首筋ぢつ

として。流石氣強き公ゆも。頓ゆ凄く五雑も震へて。いそぎこの
道へ帰らんとせし時。村雲月をさへぎりて。あゆのもあらぬ闇と
ゆり。かゝとゆ行ぢ枝もし茂て。どこゆ過まば山石高ゝ。四方
八方道ゆなく。綱の中かれ鳥ゆ迷ぢ。洩て出ぢぢ方も
ゆ。十方ゆれて立居る。かくて此方へ夫とも知らぬ酒宴の
奥ゆ更れ夜もうち忘まと照門いよく笑はゆ入く。呑て
を呼人。らくして呑。席上酒の池となり。肉の林とくけれが。
風与白波の足へぢれゆ公ばぢき。いうも白波そいづこへ行
ちゆや。先ゆ外面ゆ酔ゆまして。なつれが。よも女子の糸
の獨との廣庭の奥ふかくも行はじて。されぢとて。まのあさ
て履出くれ庭木履も足へぢれは。池の滑も氣ぢまじ。いう

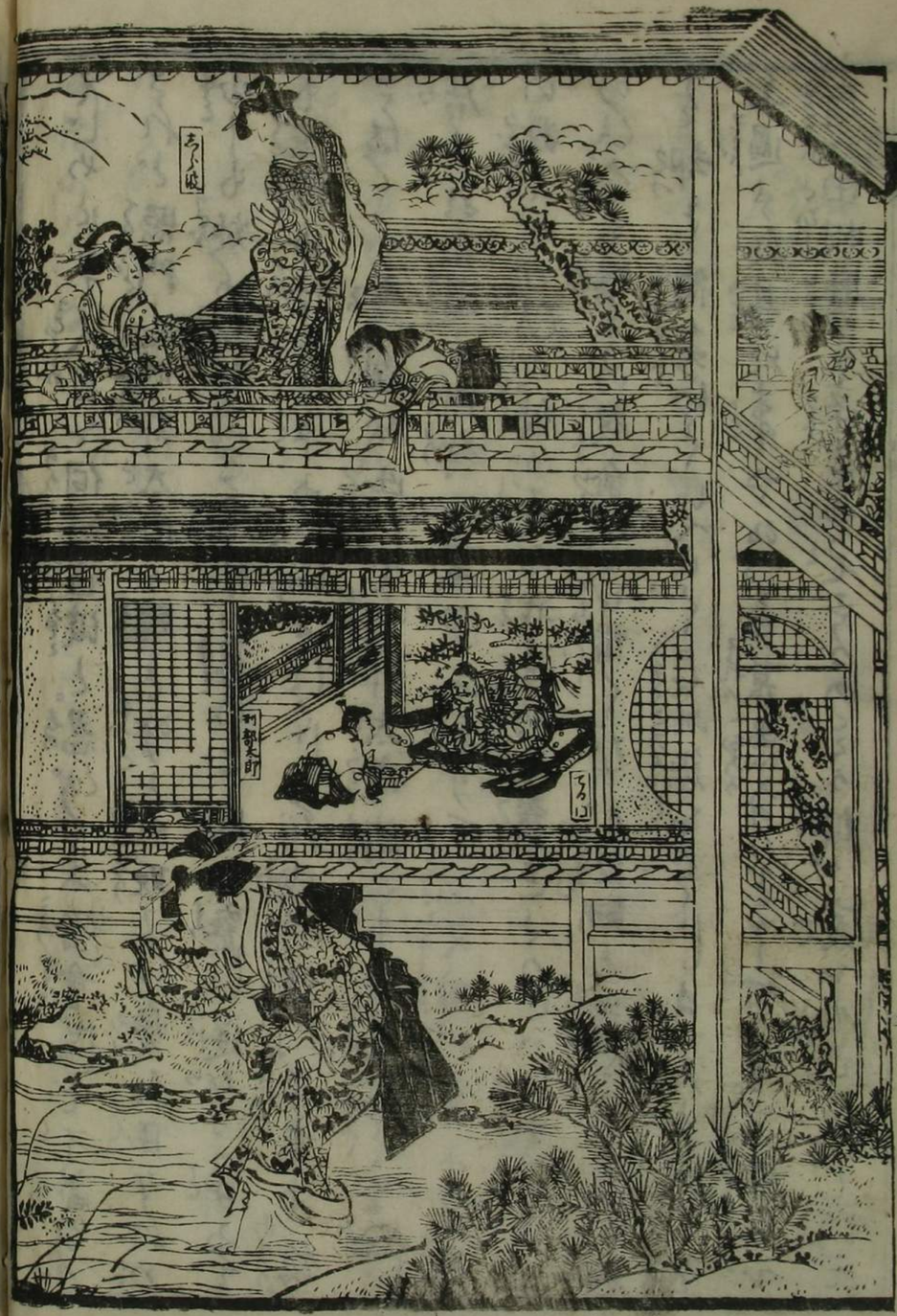
ゐ岩岸刑部丞てゑれこ。照門の声ゐ慥じて畏うさあらひ
ぬと。刑部太郎そ足早ゐ。荒石伝ひ廣庭としく走り行ば。
されど打開けゝ荒庭の面月そ木の間ゐ傾くて半そ雲
ゑ覆ゝれべ。所くれ月影ゐとゝやゝ彼所と尋めれど更ゐこの
影もなく。ゐまりに需うて假山の右なれ瀧壺の此方迫
分ゑ入べ。白波のかさい只獨忙然として立居ゝう。夫とゝる
より走り倚。岩岸刑部太郎清迎ひゐとゝりたり。何とゝく
夜中ゐ只のとゝ此所まで来りのひし。君ゐも侍兼りゝ
で。早くに来りまへし。返そゝくも何ゐ思ゐ髮ゐ獨そ行
ゝゐぞと尋同ゐ。白波のかそ蘇生ゝれ公地ゝて。件の
事ども物語べ。刑部太郎打笑ひかゝれ御園の廣ゝれば。

狐狸の住居もあれなゝゐ。去ばゝら危かりれ事なりと語
ゐ間ゐ入れ月の木の間ゝ照そのれば白波始く
ゝ涙を休め。ゐゝとせしこの顔月の光ゐ王の艶相對し
ゝれ有ゝゐ。岩岸刑部丞今更ゐ初れ恋も君の妻ゐ。
我と我身を恨めども。跡より来の責ゝもば。兎やせん角や
と公そ空ゐ恍惚と。ゝゝりゐ入ゝれて連そ帰れこゝぶに
打忘そ名れゝ。原来大膳不敵の佞人なれば。頭ゐ謂く大
丈夫何ぞ少しく義を守ゝ。一人の女ゐ公公苦しの本意
を遂ぶれゝやゐれと。ゝゝ定めて袂をひゝぬれゝゝ
此瀧壺の岩岸ゐ碎て寄れ白波そ。君と我との中ゐ
ゐ清ひゝゝゐゝや。此ゝ涙ゐ叶ひなば今死れもいと

と忍びも寄らぬ墓の言葉なれば。白波を当屋刑部が顔色
見て。只悶みあきれて又も驚くばかりこが。去りてはあまた
の墓の公といひ。吾唯今の難義をも救ひ給へ恩も深くぞ
なるべ。なりのみはけ。忽媒乱の公殿動して浅猿や。絡ふ刑部太郎
とうなれ契を結びうれが。是ぞ一つのうれ生まるべき種とぞ
成りにとうや。去程の時郎らうとびに白波は刑部太郎よしざまられ。
酒宴の席も戻りうれがいつも座席も静まりく。人々追ひ尋
求れ折なれば。白波の帰りまれふ。照門はじめ安堵のうひと
ねし。其故と問へば。奇怪の物語も。皆人冒れ驚き愕然
たるとの者ねし。照門は笑ひ給ふ。ぞとせしがたあらぬ
風情ありてはして此夜の奥にてはまり。刑部太郎はこの日を

はじめとして人目を伺ひ白波と。忍びくふ密会せしぞ不敵なる。
されど照門を刑部太郎が醜き姿と云取るけ愛れ臣なれば。
少しも疑ふ公なり。ここも君の病を察し逆なるもあそ
も照門の好める事ふ諂とはくしられ。或時照門徒然の徐
さはくの畫圖に出て刑部太郎諸ともに。其ふくを論じ
居られふ。過し御狩の畫図ふ至りて。忽又田村麿ふ遺恨
の数くおりひ出。彼が為ふ我を柄と奪ひこくりしふ大勢の中と
いひ。今も猶その腹愈ぞ口惜くなるべ巨細と説ちめてふ刑部
を却て微笑ひくくら。君此怨とてしまらんとはらば是
ふ過られ易れ事やいづこ。某愚ろうとやせども。一の計を
行ば田村麿ふ辛ろねるのこう。彼が家も亡さべし何ぞ

弓木販門
刑部太郎
絵図を
ひらいてねし
密談を


刑部太郎

是等の弱を自ら知て苦めるものやと。もなげふ云てゐるみてゞ照門ハ渡りの和紙を以て満面ふ喜悦の色を顕し。汝妙計あゝゞ速ふ施さゞゝ。願くハその良策を教んとありければ。其時刑部左右ふ顧て膝を進め。拳をにぎり覆ひ。照門が耳ふ寄て。かゝるゝふ斗しなゞ抔ふ成就せゞるべしゝ。その虚を以て實を避。その実を以て虚を伺ひ。九天の上ふ動き九地の下ふ藏れ。孫子が云ふ所なりと。韓吉懸河をさゞれがごとく説絶ぬ。日照門模ふ手をたゝき打ゝ。汝ハ我が子胤子房なり。素懐遂れ人ハ。褒美を望ふまゝ。とて。一塊の銀子と時の服をあゝて又曰。是こそ汝微品なれど。是當ゝの賞なれば留置ゞし。兎ふ角ふ汝が力を憑なりとゝ。なれ首尾ふ

岩岸が。岩をも砕く勢の眼の内ぞ。おそ流しゝ。柳此岩岸刑部太郎度成そ。こゞ智術と云力量といひ。殊ふ邪法の妙を極め道を急ぐ時ハ。縮地の法を行ゝその往返の早さ。飛鳥の如く。世の人是をゝて韋駄天刑部とあゝ名せり。又刑部が家ふ奇異の寶二ツ有。持伝ゝ。其一ツハ一葉の小判の如く青黄紫色を雑へゝ。石ふて。暗ふ魔魅の氣を含め。此宝病の人屢甚ふと放そ弄ふハいゝなる病も愈ぞといふ。又その伝掌れ附ハ。能人の鰓を凌ぐ。然ども炙て掌ゝ。毒氣五臓ふ入旬日を過ゞして必死ふ。又一ツハ金銀を鍛千鳥を鏘ゝる小柄ふして。いゝなれ人の名伝ふ。此千鳥其持ゝ。れ主れ危ふ逢ゝ時そ少声を發そゝ。古今稀なれ二品なれハ刑部ハ是

況父ようの譲りて得て常ふ所時も身に成故ふぞ。されば千万人成
物の数とせざれど。孝ふの温純と表としてその行状を人ふ〳〵に。
大悪不道ぞ多うれ。さ〳〵頃正右衛門正久が娘乙女を
殺せしも。此岩岸がなせし業とうや。されどその刻件の小柄を
取落し。暗ふ尋ねとゆとゝ。その甲斐なく公ふ〳〵もちも
しぶ。人ふ語らんも失面目なれば。空ふ〳〵ね顔ふて居うろふ。
斯く刑部太郎ハ照門と密計を約せし日より。何とぞ目ぞしし
に切を立。いま〳〵照門ふ心を寄させ。終ハ照門をも亡人とせ。
よろぞ我りのとして。白波と公のまゝに娯まんと深くも計る悪
道の其分の末ぞいうなふん。[illegible]偖も関正市正秀ハ住馴し
国を雲路の跡ふ〳〵。足ふ任せ行わどに。甚所としもわれ旅衣。

不日くや山城の。愛岩郡平安京ふ急ふれがゆしを越ふ
繁栄ふて。西ハ東も驚を並べ。貴賤となく老少となく行通ふ
有さまハ豊に。實〳〵花の都なり〳〵。深くも感じつ。夫より三條橋
の渡ぜの由緒ありけれ世代代といつれ者の方ふ足と止めし。此
世代代とつれハ父ぞ武士の筋目ありしが。次第ふ落ぶ今ハ
古器用を世渡として小厮傳婢両三人居仕ひ。妻を河取と云
娘を小家として夫婦ともに老寳なれのあて正市ハいと
ろり。何ふれと心ふ附て。且暮の世話もいと懇厚ふ他るろ
ふれば。正市も心ふ休め。此度仕官の望れ都ふ出し
るなど物語ふ。たゆ〳〵我方ふ公ふ対ふ寛々と逗留ゆり
て。其ふと叶へるなど。親戚も及びがたりそなしふ愈その

志を感じ。是より日夜大望成就を斗り。千手観世音に謁仰まつり。怠れなく願ひ奉る。ある時表に一人の武士来りて。主を宿に住れやと問ふ。世代低走り出て。こは主の来りまふともまふべし。失礼をなせりとて。座席にむかへ烟茶の礼もなすべし。世代低日頃日に絶て音信もなかりしに。いかなれば今日は歩行うつしのしれぬと。打笑て尋ねぞ。彼人答へ。されば此頃日は風の心地して邪氣のなやまふ犯と打臥れが。頓て平愈すれば打捨置がたく子細もありて来りぬ。さいつ頃は何にも粗を語正しごとく。我家に伝へる寶貨少て。持くれる主の危ふきことを聲に出すと。千鳥の小柄と一斤の藥石なり。常に我身に代事とりとりども。此度已事なれる金銀の入用ありて。色〻と

けれ共覚もなしけるとど。調ひがたく。さし當りて談ずる方もなく。いかにも遺憾なれど。此茶石に賣て其調へと。扨こそ持来りしなり。そも此功能の尊きことは。病の人此石を其身に添へ屢弄すれば。いかなる病も愈ずとしなく。又その侵嘗時は社人の餓を救ひ。精神も常より爽なり。是に延寿石といふ。願ひ價よく買求めまゐらせとて。却て鵜に多くして嘗時は毒氣盛ふ人の身を傷れるは語ひ。言に巧みして余義なくも憑まれぬ。世代低答て左あらば。こゝ二三すもあれべき梨地の小箱と紫の房付くれ紐ふて文どりて結びなせれが。蓋に羽目は敬く錦繍の嚢に藏ぬ。是を用ひ青黄の色と交へ〻れ茶

刑部太郎
世代低

関正市
岩岸
刑部太郎
道具屋
世代低方へ

石なり。世代他又いくらく。實も弥うなる寶貨なれど未其紙の妙あるを知らげれば。敢て珍しく買求がし。いと奥ゆかしいへども。先く返〳〵まわらるるとも。云も終らざれば。其證をこそせヤさんが。此家の内又ハ誰人ともせよ。空腹なれ人是を賞る時ハ。忽その證をこつぢしといふ。世代他答く。幸なるかな某今日ハ。朝まだきより。何〳〵と繁劇ちて。夕餐前あく。頗腹空うそえもど。免ぐで直みこれを賞て試んとて。其侘數度これを賞ふ。曾てその證もなくれば。半ハ信じ半ハ疑ふ折らう。不思議や次第〳〵ふ腹充て食とらぶ。仏地して。今の空腹を忘れ。あらも氣力爽なれば。もうど積ふと打く。いくゆも此昊石。真の寶貨なり。えより弥〳〵疑ふてらしふハあ

ほど。亦世渡りに常なれど。其實ハ交易もなしがたふ。斯までハ言しなりと。老實なれ仏ふより。或ハ面ふく。或ひハ惘然〳〵ふ。彼人打笑て。いやとよさのこと。言とはしまひそ。是高家の常なれば。誣ざたふあらば。右あらばいふ買求まうんふやと薦とべ。実もその說をこそかふハ。求得ぢとて。價いろく〳〵說整ひ金七斤百十二五わど。ふくて。ふれふ。彼人ハ歡び。又も近さふ尋ヤさんとて。ゆりくれ。正市ハ物の隙より始終見車ひ居くれば。彼人ハ身の丈六尺あまりはして。面色墨を流せれ如く。眼中人を射。頬ふ一つの黒痣ありて。さも怖しげるるよ。粹吞ハ我貢獲張ふ辱い。堂くたれ威風るれば。仏の内先十ひしハ九ハこれ曲者と思へど何氣なくまあて。世代他ふ向て只今物語ひし人ハ是

何ぞ此の人なれ、あやと問ふ。彼とそ當時富貴を頼みて、專驕り、
極まれり。弓木甲斐守照門が家臣、岩岸刑部太郎廣成といふもの
なり。是もよかるぬ人なれど、我ハ商人のるなれば、ものさきら彼等ハ
こゝ路を毀ぢして、世渡りに覺むまでなりなど語りつゝ、正市ハ社
行よりくゝて、其夜さり獨籠ゐおりくらく。先ず彼刑部大郎とかゝん
が物語をなけば、危ふ臨んぐ聲を發そ千鳥の小柄と所持せり
とらひしが。我拾ひ行くれも、ふるの小柄ゐく。世あハ千るとと鑄ゝる
小柄も何ぞも有ぎれば、疑ふべきもあふ稀ど。何とかゝん公
がとも笑ゑめれ。あられ我小柄も。危ふ臨んぐ声を生るとゆや。
撮こゝろぎさ便もゐし。去ゐても敵の面さ人ゑえねば、まがくも
好。されぐて仕宦に先ゐして。後ふ敵を尋んそ。一度命と君ふ

たてまつりて仕宦ぞれうゝ。いよ〳〵仕ぜざれとゝゐ。
宜ふ忠孝両ゐがら全き来ハ難しとす。所なれど又時至
らばなるべし。物ゐもめぶ。よしく敵を討絶るまでの。仕宦の
絶ぐ後るとも力ゐおよぐど。兎ふ角に心ぐふ止ぐんば。絶ゐ敵
を知れ便もあるぐし。さゐさだゐ物憂旅寐ゐこゝ路を苦しゐ。
曉ゐいくとぐも目ハ冷渡て眠ゐめあぐど。殘人の燈火影闇
ゐの行末もおりひ出ふれ。彼行嚴居士より授て。観音の隱
策を出して。数度おゝ戴き。精神をとゝして大堅成就を公ふ
祈て。ほうれゝて間眠くに。何所とも形く紫雲蔽ひ来り。異香
四方ゐ薫じぬ。雲の裡よりとるゝ玉の声きく曰。汝我ふ祈る
こと切なれば告るなり。抑仕宦の願ひぶふ叶ひなば。敵ハ自知り

得ざし。讐を復されるの天命いまだ至らざる。早く仏法に入て。
忠義を盡さざしと。教ふかと思へく旅寝の夢さめ。
正市こゝろふ是ぞ正しく日頃信ぎられ観音の告ふ疑ひ
と伏拝。辱なさに涙ぬ袖をぬらしけれ。かゝし後ハ只管仕奉
まつれとぞ。

田村物語巻之二畢